

冷戦期の「文学大使」たち

—戦後日米のナショナル・アイデンティティ形成における米文学の機能と
文化的受容—

“Literary ambassadors”:

American literature and its role in the US and Japanese national identity formation
in the Cold War era

鈴木 紀子

大妻女子大学文学部英文学科

Noriko Suzuki

The Department of English, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：冷戦，アメリカ文学，ナショナル・アイデンティティ，文化受容

Key words : The Cold War, American literature, National identity, Cultural interpretation

抄録

1950年代に加速するアメリカの冷戦文化政策に、文学はどのような関わりを持ったのか。本論文は、戦後日本で広く名を馳せ、且つGHQや米国国務省の支援を受けた米文学作家—William Faulkner, Pearl Buck, Laura Wilder—とその作品に着目し、戦後アメリカが日本に対し行った「模範的民主国家アメリカ」の自己イメージ形成にこれら米文学作家・作品が果たした役割を考察する。

一方日本人読者はどのようにその「アメリカ」を受容したのか。筆者は、日本人読者がアメリカを優越的他者として受容しながら、同時に文学に表象された、また作家自身が体現する「アメリカ」に日本文化との共通要素を積極的に見出そうとする解釈が見られる事に注目する。この独特な解釈には、戦後日本人がアメリカを「内側」に取り込み、自己として消化し、それを足掛かりにすることで形成しようとした新たなアイデンティティの一端を見ることが出来るのではないかと。

これらの考察を通し、本論文は、戦後冷戦初期に日米両国のナショナルな主体形成の一助を成した米文学の機能と、それを巡る両国間の相互依存関係を提示する。

はじめに

「図書を人類の自由の為の武器とせよ」—これは1942年、アメリカ合州国大統領フランクリン・ローズベルトがアメリカ書籍販売者協会（American Booksellers Association）に向けて投げかけた言葉である^[1]。第二次世界大戦期そして冷戦勃発により米ソの熾烈なプロパガンダ闘争が始まる1940年代後半、アメリカでは雑誌や文学作品等の図書は理念の戦いとされた冷戦を勝ち抜く為の「紙の弾丸（paper bullets）」^[2]と言われ、銃や弾薬等の戦闘手段と並ぶ重要性を持つ武器とみなされた。冒頭のローズベルト大統領の言葉は、まさにこの時代

背景を投影したものである。

1940年代から60年代の冷戦期、アメリカが日本に対して行った図書を巡る文化外交政策に様々な形で関わったのが、ウィリアム・フォークナー、パール・バック、ローラ・インガルス・ワイルダーという20年代から活躍する著名なアメリカ文学作家とその作品である。彼等は戦後日本で広く親しまれた作家という共通点に加え、占領軍及び国務省といったアメリカ政府諸機関からの積極的な支援を受けたという共通点を持つ。バックとワイルダーの作品は占領下日本の民主化教育材料と

して占領軍により翻訳出版が薦められ、フォークナーは国務省要請により来日講演を実施、日本におけるアメリカのイメージ形成に尽力した。

アメリカ文学作家として名を知られるこれらの作家が、冷戦期アメリカの対日文化外交としての図書政策に関係したことは重要である。それは作家とその作品という文化的要素が、国家間関係において政治的意味を持って機能したことの表れであり、それはまた文化的テキストのソフト・パワーとしての有用性を証明するものでもあるからだ。アメリカの権力を背景に日本に現れた彼等の作品は、戦後日本人のアメリカ観形成に重要な影響を及ぼす。同時に彼等は、冷戦期にアメリカが腐心した民主国家としての自己イメージの確立にも大きな役割を果たす。

一方アメリカの文化政策の受け手側である日本人は、文字に表れた「アメリカ」をどのように受け取ったのか。興味深いことに、戦後日本人の解釈には、アメリカ人作家とその作品に羨望と憧憬の眼差しを向けながらも、同時にそれらの中に日本文化との共通点を積極的に見出し、その「日本的」な要素に特別な共感を持つ解釈が見受けられる。この日本人のアメリカの文化的要素に日本の文化的要素を見出し、アメリカとの差異を意識的に除去する解釈は何を意味するのだろうか。

本論文は、三人の作家による著作が戦後日本に対するアメリカの文化政策において持ち得た意味合いとその役割を分析し、それを通して、冷戦期アメリカが図書政策を通して自己回帰的に追求した国家的アイデンティティの在りようを探る。更に、本論文は三人のアメリカ作家とその著作を巡る日本側の解釈に、日本人独自のアメリカ観を抛り所とした戦後アイデンティティ形成の一端を読み取る。この考察を通して、戦後顕在化する冷戦体制の下日米が共に模索した国家的アイデンティティ形成に、文学・図書が果たした機能と役割を提示する。

冷戦初期のアメリカ文化外交政策

図書を重要視するアメリカの外交政策は戦時中から開始される。1942年、アメリカの出版社数社は戦時協力の目的を掲げ、戦時図書協議会(Council on Books in Wartime)を設立する。この非営利活動法人は、戦時情報局(Office of War Information(OWI))と連携し、図書を通して国内外のアメリカ人市民や兵士の戦争に対する意識を高め、また彼らの間

にアメリカの道義心、国家としての連帯意識を構築・維持させることを目指した^[3]。この組織の掲げたスローガン、「図書は理念の戦争における武器である(Books Are Weapons in the War of Ideas)」は、まさに図書という文化的創作物を理念の闘いとされた冷戦に勝利する為の武器とみなす心情を如実に表している。このスローガンは、ローズベルト大統領が政府のプロパガンダ政策のスローガンに応用したことから頻繁に言及されるようになり、軍事関係者、出版関係者の間で広く共有された概念となる。彼らにとって、図書は極めて重要な機能を果たし得る情報戦略、プロパガンダ政策の政治的手段だったのであり、アメリカと異なる社会思想体系を持つ国々、とりわけ戦時中軸軸国の影響下にあった人々を『更生(rehabilitate)』する手助けとなる最も有用な手段の一つ^[4]だったのである。

図書を重要媒体としたプロパガンダ政策は、1948年のスミス・マント法の可決と共に加速化する。この法律は、メディアや人的交流を通じた国務省の海外情報活動を可能にしたもので、この法律により、政府の文化政策と外交政策が密接な結びつきを持つようになる。換言すれば、図書等のメディアをめぐる文化政策が、冷戦期アメリカの国際外交政策における情報戦略の重要項目として組み込まれたことを意味する。

武器としての図書を巡る冷戦期文化政策は、国家の威信をかけた国際規模の巨大プロジェクトであった。戦中から戦後まで、陸軍省や国務省を始め数々の政府機関および占領軍、民間機関がこの政策に関わっている。アメリカ政府の文化外交政策の最大の目的は、アメリカの「正しい姿」を「適切」に描いた図書を諸外国の人々に読み学ばせることによって、「人々にアメリカ国民の伝統、歴史、基本的気質、そして大戦におけるアメリカの役割を知らしめ」ることであった^[5]。そしてこのアメリカに関する「正しい理解」を普及させることにより、世界に流れるアメリカの悪いイメージや「不正確な情報」を払拭し、模範的民主国家としての国際的地位を確立しようとしたのだ。政府が払拭しようとしたアメリカの悪いイメージとは、ソ連のプロパガンダ政策が世界に流布した、アメリカを徹底した利益追求型の商業主義、文化や芸術的感覚を欠く非文化的な国民性、ハリウッド映画に象徴されるギャングや暴力が横行する無法社会、非白人種に対する人種差別主義、帝国主

義といった否定的でステレオタイプ的なイメージである。こうした反米的イメージを打ち消しソ連のプロパガンダ政策に対抗すべく、アメリカは大規模な広報外交政策に粉骨砕身するのである。

こうした理想的自国イメージを海外に流通させるアメリカの一連の文化外交政策は、同時にアメリカ自身のアイデンティティ形成の過程でもある。「ソ連的なもの」、「反民主主義的なもの」、人種差別等アメリカのイメージを阻害するものを意図的に排除する行為は、アメリカが理想・規範とするものに対峙するネガティブな「他者」を設定しながら、対極に「我・我ら」を構築するアイデンティティ形成のプロセスでもある。文化政策でアメリカが懸命に対照化しようと務めた「暴力的帝国主義ヨーロッパ」像と「相互交流を重んじる非帝国主義アメリカ」という二項対立的な国家像は、既に実在するアメリカの姿ではなく、アメリカが自らに希求した我の姿である。いわばアメリカは、ジョアン・シャープが指摘するように、対立するソ連を別の自己 (alter ego) としながら戦後の自己イメージを形成しようとしていたのだ^[6]。この意味において、文化政策において政府諸機関が行った海外向け図書選抜のプロセスは、この「アメリカ」というナショナルなアイデンティティ構築プロセスそのものである。海外に送るアメリカ図書を選ぶ際、国務省や OWI は「最良のアメリカ文学」を選び出すことを目標としたが、それは必ずしも文学的・学術的に価値の高い作品を選出することを意味しなかった。それはむしろ、政府の政策およびアメリカが目指した自己像に合致し、またそれを補強する「最良の作品」を選ぶ、図書と理念の同一化プロセスだったのである。

1950年の朝鮮戦争勃発以降、アメリカのプロパガンダ政策は過熱する。1950年、トルーマン大統領は「真実のキャンペーン(Campaign of Truth)」を開始する。この政策は「アメリカの好意的な様相」をソ連の反米的プロパガンダを覆す「真実」として意識的に強調して発信する国家規模のメディア政策で、諸外国にアメリカの様々な側面をバランスよく提示するというそれまでの文化外交基本方針は一転、この政策開始以降アメリカはプロパガンダ色を強めた方向へと移行していく。アメリカの発達した近代性や最先端科学技術、多民族社会ゆえの人種的寛容性、市民の高い生活水準等が、アメリカの優れた性質として積極的にアピールされた。反対に、非民主的と思われる人種問題等の

要素は「アメリカの大義に対し有害」として徹底的に排除されていく。

だが1953年にアイゼンハワー政権が発足すると、朝鮮戦争に煽られた反共心剥きだしのプロパガンダ政策は見直しが図られ、政府は一見政治色の薄い人的交流事業を基盤とした文化政策へと重点を移す。「アメリカ国民は人類共通の価値や進歩を大切にしている」というヒューマニズムを前面に押し出した平和主義的イメージの強調路線へと向かうのである^[7]。アイゼンハワー大統領が1956年に開設した「人から人へプログラム(People-to-People Program)」は、文字通り市民間の草の根的交流を通して他国異文化の人々にアメリカの外交方針に則した情報を提供し、両者の相互理解と関係促進を目指した文化外交政策である。アイゼンハワーは、冷戦を勝ち抜く為にはアメリカ人一人一人が異国の地で直接的なコミュニケーションを図り、国家を積極的に支援することが必要不可欠として、政治家ではなく一般民間人個人の行動が国家外交政策に有する重要性を強調した^[8]。この理念を基に、当プログラムは米国広報・文化交流庁 (United States Information Agency) の支援の下、アメリカ人と外国人との間で演劇ツアーや音楽コンサート、スポーツ、ペンパル活動等様々な民間交流活動を盛んに実施した。冷戦期の政治的イデオロギーを多分に孕んだ文化政策ではあったが、このプログラムはアメリカ市民のアジアとその文化への関心を確実に高め、アメリカ社会に「アジア流行り」を巻き起こす大きな効果を生み出した。

実はこの異国の人々との民間交流や相互理解を重点とするアメリカの文化外交政策の転換は、国内の人種問題と密接に関係していた。模範的民主国家イメージを強調するアメリカにとって、国内に抱える人種問題—特に南部の黒人差別問題—は文化外交方針の矛盾を呈し、実際ソ連を始め海外からはこの矛盾が批判の標的となった。とりわけ冷戦の激化に伴い、日本を始めアジア諸国の取り込みが緊急課題であったアメリカにとって、人種問題は国家の体面と共に国家安全をも脅かす厄介な存在であった。人種的・文化的他者との交流と相互理解を強調する文化外交方針への転換は、差異に寛容な多文化主義的・平和主義的アメリカのイメージを前景化し、人種問題を表面下に不可視化させこの難題を回避する為の苦肉の策だったのである。

1950年代に顕在化するこの「人種的・文化的差

異に寛容なアメリカ」像を発信するアメリカの社会政治的戦略を、クリスティーナ・クラインは「冷戦オリエンタリズム (Cold War Orientalism)」という概念によって解析する。クラインは、戦後 1940 年代から 60 年代初頭におけるアメリカの知識人等のミドル・ブラウ層が、大戦時まで支配的であったアジアを「他者」とみなす眼差しを一転し、両者の結び付きの重要性を強調する言説を生み出したことに着目する。この新たに生み出された言説は、アメリカとアジアを共に世界を構成する「対等」な同志としながら両者の結び付きを強調し、冷戦のコンテキストに則したアメリカ・アジア間関係図式(map)を創造する。この言説は、アメリカのアジアへの政治的・軍事的介入を、武力行使による暴力的で強制的な西欧の帝国主義的介入とは異なり、あくまで現地の人々との交流と理解に基づく相互的協力関係と定義した点において特徴的である。この言説は、異なる文化的背景を持った者同士が互いの特徴と差異を積極的に学び理解することを強く要請する。他者に対する理解と共感を通して初めて西洋と東洋間の差異は克服可能となり、差異の克服によって両者は差異を超越したヒューマニズムに基づく関係を築くことが可能となるのだ。このように、この言説はセンチメンタリズムと理想主義の枠組みを内包しながら、アメリカとアジアの関係を互惠関係と定義することによって、アメリカを「抑圧的な共産主義国家ソ連」から差異化し、異文化と個人の権利を重んじる民主主義の体現者として出現させるのだ。

このアメリカとアジアの絆を理想化し強調する言説はアメリカ人の目をアジアに向けさせ、国内ではアジアに関する著作や研究への需要が急激に高まる。先に述べた「人から人へプログラム」効果によるアジア流行もその一側面である。同時にアメリカはアジアにアメリカの良いところを知ってもらおうとする数々の文化交流プログラムや教育プログラムをも生み出していく。1945 年以降、アメリカではアジアを主題とする映画や文学などのメディア作品が大量に生産されるが、その多くが人種的・文化的他者であるアジアとアメリカの差異を超越した人間関係を称揚するものであった。アジアの人種的背景を持つ孤児と白人家庭の養子縁組の支援や日本人被爆者女性の皮膚回復手術支援といった人道支援がアメリカで活発に行われるのもこの時期である。このアジアとの結び付きと相互理解を強調する言説は、人種の違いによる差

別や偏見、武力的帝国主義への強い批判と並行しながら展開する。文化多元主義に基づくアメリカ社会の多様性を自認しながら、この言説はアメリカの人種の寛容性とリベラリズムを訴えるのだ。

しかしながら、このアメリカの一見平和主義的、不介入主義的なアジアへの眼差しは、アメリカ、アジア間の現実的な権力関係を不可視化し、その上で他者アジアを「協力関係」の名の下に「内側」に包摂するアメリカの拡張主義を継承したものである。共感や理解という感情的な繋がりを強調する言説は、対ソ連を念頭にアジアを民主主義と自由主義経済のアメリカ側に取り込み統合しようとするアメリカの強力な政治政策の一側面である。アメリカとアジアの言説上の互惠関係の構築は、アメリカの伝統的拡張主義の延長線上にあり、アメリカ主導のグローバル化を補強・推進する世界関係図に基づいた帝国主義実践プロセスの一端だったのだ。

こうしたアメリカ文化外交政策を背景に、アメリカの戦後日本占領政策は行われた。日本の民主主義国家への改革再建にあたり、連合軍最高司令官総司令部 (General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers, (GHQ/SCAP)) は図書や教科書、雑誌、ラジオなどメディアを媒体とした社会改革政策を打ち出す。特に、GHQ/SCAP はメディアの中でも図書を最も効果的な民主化教育手段と位置付けていた。なぜなら、OWI が「図書の持つ影響力は半年もしくはそれ以上数十年に渡り得る。図書は最も息の長いプロパガンダなのだ」^[9]と明言したように、読書行為は読む者が長い時間をかけ自主的に考えたり感じたりするために、新聞や雑誌よりも長く読者の記憶に残り、心理的影響が大きいと考えられた為である。また、図書の持つ娯楽性はプロパガンダ色を隠し読者の抵抗感を回避する効果も期待された。

戦後日本の書棚をアメリカの図書で埋め直すべく、占領軍は様々な図書政策を実施する。例えば、連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサーの要請により結成された国務省管轄のアメリカ教育使節団は、1947 年、アメリカ民主主義の思想を日本で促進する為の参考教材として選抜した六二〇冊の「本の贈物(Gift of Books)」を日本に寄贈する。この図書は、使節団の設定した「米国の生活を完全に思い描くことができる」等の選抜基準により選抜されたもので、日本到着後は一定期間都市部で展示された後に全国各地の学校図書館に配布さ

れた^[10].

「アメリカらしい」と思われる図書を日本に送ったのは教育使節団だけではない。アメリカは実に様々な機関を通して日本に図書を送っている。陸軍省教科書委員会は「民主主義の理想の考え方を日本で促進するために、形式・体裁・中身・期待される効果全てが整っている」として選抜された四百冊の図書を送り^[11]、また、全米最大の博物館組織であるスミソニアン協会や、OWIと連携し国際的図書流通取引を請け負ったアメリカン・ブック・センター等の非政府組織も日本に多くのアメリカ図書を送っている。これら図書政策が示すように、占領下日本における図書政策はアメリカ政府のみならず数多くの民間組織との密接な連携の下に行われた国家規模の政策だったのである。

GHQ/SCAPは、アメリカの図書館システムに沿った国立国会図書館の設立、学校図書館・公立図書館の整備を促進させ、日本での効率的なアメリカの出版物普及拡大を図る。終戦から三か月後には「精選されたアメリカの出版物コレクション」^[12]を所蔵したCIEインフォメーション・センター^[13]と呼ばれる図書館を設立し、雑誌や文学作品、音楽や英会話教室等広く「アメリカ」を日本人大衆に紹介する機会と場所の拡大を図る。こうした施設で公開された資料が提供する「アメリカ」は、とりわけアメリカの物質的豊かさを印象付けるものであった。自動車や目新しい西洋式住宅、色彩豊かな女性のファッション、人々の高い生活水準等が示すアメリカの物質的豊富さと現代的な生活様式は多くの日本人の眼を奪う。他方、人種問題や共産主義、ソ連に関する書籍は書棚に並ばぬよう積極的に排除された^[14]。

更に1946年11月には、CIEは自ら選抜した外国図書の商業的翻訳権を許可する入札制度を導入、アメリカの出版物を速やかに日本語に翻訳出版することで、英語を理解しない日本人大衆への普及促進を図ったのである^[15]。CIEによると、翻訳権を与えられた図書は必ずしも文学的価値の高い「いわゆる『最良本(best books)』を集めたものではなく」、占領下日本が「ポツダム宣言で宣言した義務の遂行に貢献し得るものを基準に選ばれた」図書であった^[16]。明らかに、CIE翻訳許可アメリカ図書は戦後日本民主化政策遂行にあたり有効な手段として用いられたのである。

ワイルダーの西部と日本民主化政策

この入札制度でCIEにより翻訳出版が推薦されたのが、ローラ・インガルス・ワイルダーの「小さな家シリーズ(The Little House Series)」と呼ばれる十九世紀西部開拓時代を舞台とした一連の物語である。これは、作者ワイルダーが少女時代実際に過ごした中西部フロンティア各地での開拓生活を物語化した、代表作『大草原の小さな家(Little House on the Prairie)』(1935)を含む全九巻からなる物語である。このシリーズは、戦後日本人の間で非常に高い人気を得た作品で、現在も尚西部パイオニア物語の代表格として愛読される作品である。日本では1949年にシリーズの第六巻に当たる『長い冬(The Long Winter)』(1943)が初めて翻訳出版された。この作品はCIEの第一回入札に出されるが、その際出版社の間で「最も人気を集めた本」の一冊となる^[17]。

ワイルダーの「小さな家シリーズ」は、アメリカ教育使節団が日本に寄贈した「本の贈り物」の中にも含まれていた。使節団はこの西部物語を「アメリカの風景一過去」という分類に入れており、アメリカの過去の風景をよく表した作品として推奨したことが伺える。更に、この「小さな家シリーズ」は、マッカーサーの推薦により翻訳出版が進められた経緯を持つ上でも注目に値する。マッカーサーはワイルダーの西部開拓物語が「アメリカの民主主義的生活の理念を実に生き生きと伝えている」とし、日本での翻訳出版、学校教材としての利用普及を命じた^[18]。この背景には、「小さな家シリーズ」の熱烈な愛読者であったマッカーサーの妻ジーンの夫への強い推薦があったと言われている^[19]。

アメリカが占領下日本に教示しようと目論んだアメリカ像を考える時、CIEが選奨したアメリカ文学の中にこの西部物語シリーズが含まれていたことは興味深い。なぜなら、CIE推奨の作品群には、西部開拓時代の西部フロンティア、または開拓生活を描いた作品—ここでは「西部文学」と呼ぶ—が多く含まれていたからである。CIE推薦図書のみならず、先述の教育使節団の「本の贈り物」にも多くの西部文学が含まれていた^[20]。また後述する様に、作家パール・バックが「アメリカの生活を理解する本」としてアジア他諸外国への推薦図書として選出した図書群にも、西部を題材とした作品が含まれている。このように、図書選抜過程で開拓時代をテーマとする西部文学が重要視された背景には、図書政策方針と西部を結び付ける

何らかの意義があったことが伺われるのだ。

理想的なアメリカ像、民主的「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」を日本に教示する上で、西部開拓時代の物語が有用であるという認識は、占領軍を始め、アメリカ国務省や教育使節団の間で共有された意識であった。国務省は、アメリカの開拓者精神は「アメリカ人の特長として非常に大きな影響」を与えたアメリカ固有の精神で、「アメリカの若々しさ、理想主義、楽観主義、伝統よりも新しさを重んじる傾向は、より良い生活を打ち立てようとした開拓者の歴史から始まった」と断言している^[21]。この言葉が示すように、国務省は西部にアメリカの原点を見出している。つまりマッカーサーら多くの占領関係者がワイルダー作品を始めとする西部文学を読書奨励した背景には、彼等が西部フロンティアとアメリカ民主主義の理想的な姿、すなわち「アメリカらしさ」とを強く結び付ける意識があったことが伺われるのだ。

ワイルダーの「小さな家シリーズ」で一貫して強調され、読者に最も強い印象を与えるのは、主人公開拓者一家の何事にも負けない精神の強さ、そしてそれを支える自由と独立の開拓者精神である。自由・独立は、周知のようにアメリカが伝統的に国家の基本精神として尊ぶ精神である。主人公は、便利な町の生活ではなく、未開の西部荒野に何者にも干渉されない究極の自由を見出す。だが一家はその外界から隔たれた自由ゆえに、猛吹雪や飢えと寒さ、襲いかかる野生動物、絶え間ない労働や病と立ち向かわなければならない。しかし一家は常に深い知恵と創意工夫、努力、そして自然への揺るがぬ愛情と信念を持って、西部の大草原に自由を見続ける。そして家族一人一人が互いを敬い助け合いながら苦難を乗り越え成長し幸福を得る。つまり、「小さな家シリーズ」が描き出す西部とは、西部フロンティアを自由と独立の象徴的空間とする伝統的な西部言説に基づいた西部、すなわち歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナーが言うところの民主国家アメリカの原点としての西部像である。ワイルダーの作品が現在も尚アメリカの人々に「私達のパイオニア・ガール」という愛称と共に愛読され「私達アメリカの本当の物語」と認識されているように、この一連の西部開拓物語は古き良きアメリカ像、理想的「アメリカらしさ」を体現し、アメリカ人の国民的アイデンティティに精神的基盤を与え続ける。作者ワイルダーは、「小さな家シリーズ」を書いたのは、

「子供達に何が今のアメリカを作るのか」を理解して欲しかったからだと述べている^[22]。彼女のこの発言には、自分が生きた西部開拓の時代が今のアメリカを創り育んだとする信念が表れている。彼女は文学を通して、既に過ぎ去りし西部開拓時代、アメリカの原点としての西部とその精神を伝える代弁者であり続けるのだ。

CIE や国務省、教育使節団がワイルダーの作品を始めとする西部文学に読み取った、理想的民主主義国家アメリカの姿とは、まさにこうした西部像を指すと言って良い。自由・独立の開拓者精神を称揚し、開拓というアメリカの領土拡大を象徴的に肯定する西部像は、アメリカ主導による民主化の途中にあった日本に教示するには最適な教育的材料と考えられたのだ。

フォークナーとアメリカ文化外交政策

開拓時代の西部が民主主義アメリカの原点を提示して見せる一方、「日本と類似性を持つアメリカ」を提示したのが南部作家ウィリアム・フォークナーである。フォークナーは1955年8月1日、長野で開催されるアメリカ大使館主催のアメリカ文学セミナーおよび東京・京都での講演会に特別講師として参加するために来日する。彼の来日実現の背景には、彼に対する国務省からの強い要請があった。国務省教育文化局(Bureau of Educational and Cultural Affairs)は、フォークナーの訪日はセミナーへの貢献のみならず、日米間関係の更なる改善にも貢献するであろうとフォークナーに進言している^[23]。

この国務省の要請を、本来内向的な性格であったフォークナーは一度断っている。彼は、日本とアメリカは歴史も文化も異なるために「理解し合うのは難しい」と考え、国務省の期待を自分の手に余るとして断るのである。しかし、国務省に説得されると、彼は「自分が他の国の人々にとって何か出来ることがあるのなら、その努力をすべき」と考えを改め訪日を決意する^[24]。一度決意を固めた彼は、自分の訪日の目的は「彼が望むアメリカの良き姿を提供」し、そして日米両国民が共に「同じ人間として」交流し合い、二国間の「より良い関係」を築くことであると理解するに至る。とりわけ彼は自分がアメリカ南部の「本当の姿(a true picture)」を日本人に示せばよいと考えた^[25]。

来日したフォークナーは、過密なスケジュールにもかかわらず、講演と幾つもの対談を精力的に

努めた。日本の地に降り立ったアメリカ文学の巨匠を一目見ようと、彼の訪問地には多くの日本人ファンや研究者、取材陣らが押し寄せる。彼の日本到着直後には羽田空港内でインタビューが行われた。

フォークナーが講演した場所は東京と京都にあるアメリカ文化センターであったが、このセンターは、CIE 図書館が 1952 年の日本の占領終結に伴い国務省に移管された際に名称を変更したものである。CIE 図書館およびアメリカ文化センターは戦後日本の民主化に大きな影響を与えた施設である。戦後物資不足に喘いでいた日本人の目には、良質の紙に色鮮やかで目新しい写真が豊富に掲載された書籍を無料で公開するこれらの施設は、まさにアメリカの豊かさ、先進性の証と映った。老若男女を問わず、学生から大学教授、主婦からジャーナリストまで幅広い層の人々が利用したアメリカ文化センターは、当時の日本人にとって「アメリカ」を肌で感じ吸収することができる極めて特別な空間であった。このアメリカ文化センターでフォークナーが講演を行ったということは、センターが国務省管轄であったという事情に加え、この施設がまさに「アメリカ」を象徴する空間であり、アメリカ文学を代表する作家の一人である彼を迎え入れるには最適の場と考えられた為でもあるだろう。

アメリカ代表として日米間の親善大使の役割を背負い来日したフォークナーであるが、興味深いのは、彼が自身の故郷であり自作品の舞台でもあるアメリカ南部と戦後日本の間に類似点を見出し、その類似点を「アメリカ人と日本人の相互理解を可能にする繋がり」だと考えた点である。この日本とアメリカ南部の類似点とは、まず南部の伝統的貴族社会と日本の「サムライ社会」に共通する封建制度、そして両者における小作人制度である^[26]。更に、より重要なのは、アメリカ南部そして日本が共に「戦争を闘い、侵略され、敗北した」経験であると彼は述べる^[27]。次の引用は、彼が日本の文学の未来についてどう思うかを尋ねられた時の彼の応答である。

A hundred years ago there were two cultures, two economies in my country, the United States, and ninety-five years ago [1860] we fought a war over it and my side were whipped. We were invaded, we went through something of your own experience,

only our invaders made no effort to help us.^[28]

更に、フォークナーは日本の若者達に向けて次の様なメッセージを送る。

…Americans from my part of America at least can understand the feeling of the Japanese young people of today that the future offers him nothing but hopelessness, with nothing anymore to hold to or believe in.^[29]

ここでフォークナーの言う「戦争(war)」とは南北戦争を示しており、「私側 (my side/part)」は彼の故郷である南部を指している。彼のこの言葉が示す通り、フォークナーはアメリカ南北戦争における南部の敗戦の経験と第二次世界大戦における日本の敗戦の経験を重ね合わせ、南部・日本共に侵略され打ち負かされた者同士という類似点と共通点を見出しているのである。国務省から最初に訪日を要請された時には、日米は「お互い文化が違うので分かり合えないだろう」という懸念から訪日に消極的であったフォークナーであるが、南部が持つ伝統的封建社会制度と戦争の敗北の経験ゆえに一彼自身は戦争を直接経験していないが一日本人と南部人、戦後日本とアメリカ南部は分かり合うことが出来るとしたのだ。

ただし、日本に南部と同じ侵略と敗北の経験をもたらした「侵略者」は、皮肉にもフォークナーの祖国アメリカであり、この意味で彼は侵略者の側に立っている。フォークナーはこの点には直接触れず、むしろ南部は敗北後の混沌と怒りの中から「良い文学を生みだした」とし、敗戦後未だ混沌迷の中にある日本にも「そうなって欲しいし、そうなるだろう」と述べ^[30]、アメリカの加害性を回避・不可視化し、日本人の視点を敗戦の事実を乗り越えた先の未来へと逸らす。そしてこの日本の未来は、南部が「侵略者」北部に「何の助けももらえなかった(no effort to help us)」のとは対照的に、アメリカにより助けられたことにより訪れる未来であることが示唆されている。そして過酷な敗戦の経験ですら、フォークナーは「もう全て過去のことであり」、「我らの国は今一つ」と述べる。

I believe our country is even stronger because of that old anguish since that very anguish taught us compassion

for other peoples whom war has injured.^[31]

南北戦争の経験、しかも怒りという過酷な経験ですら、フォークナーはアメリカを一つにまとめ強化した要因と戦争の肯定的側面を強調してみせる。こうして南部の経験と重ね合わせられた日本のアメリカによる占領は、日本が将来的に堅固たる統一国家に生まれ変わる為の必要不可欠な布石と化すのである。

フォークナーが示したアメリカ南部と戦後日本の類似性は、現在ではよく知られる事項である。寺沢みずほは、南部と黒船来航以降の日本の状況を「民族強姦」というジェンダーの視点を用いた概念で解析する。寺沢は「民族強姦」を、前近代的社会が「近代社会の圧倒的な力に直面し、『文明』『近代』の概念に適合するよう、根底からの改変を強いられる」こと、そして前近代社会が、「強大な他者なる近代社会の大義を受諾し、みずからの文化や価値観や主体性を放棄することを迫られる」ことと定義している^[32]。

寺沢は、この概念を共通軸に南部と戦後日本の状況を重ね合わせる。つまり、アメリカ南部にとって南北戦争での敗北は、前近代的な貴族主義と奴隷制から成り立つ南部が、産業化・資本主義化した近代社会北部により「強姦」、すなわち伝統的南部性の否定と放棄を強制され、他者である北部への適合を迫られたことを意味する。一方日本にとっては、敗戦とアメリカによる占領は、前近代的軍国主義・国家主義日本の近代国家アメリカによる「強姦」であり、続く日本の民主主義化、アメリカ化は「異人」への強制的適合であったことを意味する。だが寺沢が分析するように、フォークナーの南部文学は、敗北による「滅びの宿命」を背負いながら、しかしまだ「完全には滅びきってはいないモラトリアムの時期」を描いており、ゆえに作品に登場する南部の主人公男性達はみな南部の「滅び」を止めようと必死になる^[33]。つまりフォークナーにとっての南部は、「強姦」により「根底からの改変」を強いられながらも、「犯される」前の自己を求め擁護する自己の闘ぎ合いの場である。この自己否定と自己擁護の闘ぎ合いは、後述するように、日本の敗戦後の「精神的空白」の中、新しい自己をアメリカに求めながら、同時に伝統文化への回帰を模索した日本の状況と共鳴し合う。

寺沢のこの「民族強姦」という視点に照らし合

わせて見ると、フォークナーの示唆する南部と日本の敗戦・侵略という類似性は、両者が共に近代化社会という発展性と男性的権力を持った他者に自己否定されながら、同時にその否定された自己を侵略者に擦り合わせなければならないという苦い共通経験の類似性である。

冷戦体制下に置かれた日米関係強化の役目を背負って日本を訪れたフォークナーが、敗戦の経験を日本と南部間の共通項、延いては日米間の相互理解を可能にする共通体験として挙げたことは注目に値する。なぜなら、彼が来日する僅か三年前までアメリカの占領下にあった「劣性国」日本とアメリカを、敗北という負の経験を共通項に「対等」な関係へと結び付け、相手の怒りや苦しみに共感できる「同志」とする姿勢は、それがいかにフォークナーの真摯な想いから生まれたものとしても、クラインの冷戦オリエンタリズムに裏打ちされたアメリカの冷戦文化政策のイデオロギーに通底するものであるからである。彼をアメリカ文学の代表者、更にそれ以上に「世界的作家」^[34]と思ひ畏敬の念を持って集まった日本人達にとって、彼が自分達と同じ敗者であるという共通点、そして戦後の焦土から彼自身が体現する優れた文学が誕生したという事実は心地よい響きを持っていたに相違なく、フォークナーは戦後を成功裡に生き抜いた先達者として優位的立場を保持しながらも、日本人の良き理解者として彼らの心をアメリカ側へと惹き込むことに成功しているのである。そして先述のように、フォークナーは、この時占領者としてのアメリカの暴力性を効果的に回避しながら、代わりに助けを与え導く者としてのアメリカを創造するのである。

バックのアジア表象と日米交流活動

日米の協調路線をより強調する文化外交を展開したのが、「アジア文学」作家パール・バックである。フォークナーと同じくノーベル文学賞受賞者として世界的に名を知られるバックは、アメリカ初の女性ノーベル賞受賞者（受賞1938年）であるのみならず、ピューリッツァー賞を始め数多くの賞を受賞、更に七十を超える作品を発表し、その作品の多くがベストセラーになるという、二十世紀で最も人気を得た作家の一人でもある。

バックの文学の特徴は、アメリカ人である彼女が、アジア、とりわけ中国を物語の舞台とした点である。彼女は宣教師の娘に生まれ、生後三カ月

で両親と中国に渡り、その後四十年以上に渡り中国で暮らした経験を持つ。彼女は当時としては珍しく中国語と英語を自由に操り、中国とアメリカの社会文化を実体験として知る「文化的バイフォーカル (culturally bifocal)」な人物であった^[35]。アメリカ国内では彼女はアジアの専門家として一目置かれた存在で、国務省は中国での図書政策にどのアメリカ図書を選ぶべきか彼女に助言を求めている。彼女の伝記をまとめたピーター・コンが「バックはアメリカ人にとっての中国を創造した」^[36]と述べるように、彼女のアジア表象は、二十世紀初期アメリカの中国・アジア観形成に多大なる影響を与えた。

バックと戦後アメリカの文化外交との関わり方は多岐に渡る。特に彼女は出版・ジャーナリズムの分野で能力を発揮する。1945年までの戦時期、OWIを中心とした政府の海外向けアメリカ図書政策には国内の多くの出版社が密接な関わりを持ったが、中でもバックが夫と共に経営したジョン・デイ・カンパニーは、出版社としては小規模ながら、アジア市場に焦点を絞った出版活動を行った点において「最も国際的意識を持った出版社」であった^[37]。彼女はこの出版社を通して代表作『大地(The Good Earth)』(1931)を発表、この作品を会社の看板小説にアメリカ図書のアジア市場への流通およびアメリカ国内での「アジアもの」の普及と流行に貢献した^[38]。他にも、彼女は『アジア(Asia)』という協会誌(当協会については後述)を発行、同誌の中に「アジアの書棚」というコラムを設け、アメリカの人々にアジア文学を積極的に紹介する活動も行った^[39]。

日本での彼女の人気は絶大なものであった。『大地』は発表後一年で一五〇万部を売るベスト・セラーとなり、1950年代まで常に売り上げ上位の座を占めた。アメリカ人でありながら東洋に造詣の深いバックは、日本人読者の注目を集め非常に好意的に受け入れられた。

小説に加え、彼女は戦後アメリカ国内のみならず海外、とりわけアジアに向けて数多くのエッセイを発表している。例えば終戦翌年の1946年、バックの『アジアの友へ—アメリカ人の生活と国民性について』^[40]が日本で毎日新聞社から出版された。このエッセイは、バックの見たアメリカの姿を、アメリカ人の気質、食事、生活習慣から人種問題、原子爆弾投下の問題までを広く取り上げ説明したものである。この中で、バックはアメリカ

人の最大の特徴は「単純なる正直さ」であると述べる。アメリカ人は植民地を欲しもせず、良いとも思わず、何より他国の人々を支配することを好まず、地味で勤勉で、「一言でいえば、あなた方が友達にすることができる種類の人々」であると主張する^[41]。バックが描き出すこのアメリカ人のイメージは、商業主義、帝国主義とソ連のプロパガンダに揶揄された典型的なアメリカ人のイメージを覆し、「アジアと友達になれるアメリカ」というアメリカの異文化圏への友好的態度と寛容性を前景化してみせる。人種問題や原爆というアメリカにとっては禁忌的事項に触れたこの著作が、終戦直後に占領軍の検閲を通り日本語に翻訳出版されたのは、日本占領をヨーロッパの植民地主義と差異化し、日米間の相互協力関係と定義付けようとしたGHQ/SCAPにとって有益であった為ではないかと考えられる。

バックの作品は、占領下日本のCIE翻訳プログラムにも登場する。彼女の児童向け作品『水牛飼いの子供達(The Water Buffalo Children)』(1943)と『つなみ(The Big Wave)』(1947)は、CIE翻訳プログラムの推薦図書に指定され、『水牛』に関してはアメリカ教育使節団が日本に配布した「本の贈り物」の中にも含まれていた^[42]。日本でベスト・セラー作家として名を知られたバックの作品は出版社の高い関心を集め、入札では多数の出版社の間で翻訳権が争われた^[43]。

『水牛飼いの子供達』は、バック自身を思わせる中国で暮らすアメリカ人少女が、水牛に乗った中国人の子供の兄妹と出会う物語である。中国人の妹は、アメリカ人少女を「外国人」として心を開かず、アメリカ人の食習慣や体臭についてステレオタイプ的な発言を繰り返す。一方兄とその父は中国の風習を良く知るアメリカ人少女に丁寧に接し、彼女と親交を深める。この中国での経験を、成長しアメリカに戻り母親となった彼女が自分の子供達に話して聞かせる。彼女の子供達は母親が話す中国とアメリカの違いに目を丸くする、という物語である。

CIEが何故この作品を日本人に読書奨励したのか、それはこの物語が東洋の中国と西洋のアメリカの対比がふんだんに盛り込みながら、東西の和解と親交を主題としていることが理由として考えられる。物語では、主人公のアメリカ人少女が、自宅では西洋風の生活をしながらも外では周囲の中国文化に沿って中国人と触れ合い、次第に中国

人の兄・父に受け入れられていくという心とむ物語展開が印象的である。人種的偏見を克服し、異文化に寛容な思考は民主主義社会の基本的要素であるが、東洋の異文化に理解を示し現地の人々と親交を深めるアメリカ人少女の姿は、民主的態度において模範的であるのみならず、冷戦勃発によりアジアと関係強化を図る必要のあったアメリカの文化政策方針にとっても理想的と考えられたのではないだろうか。

バックの文化外交への関わりは文学作品によるものばかりではない。彼女は作家としてのみならず、アメリカとアジアの文化交流活動を支援する活動家としても有名であった。1941年、彼女は「異なる地域に住む人々の相互理解を助ける」^[44]という目的で、アメリカ・アジア間の文化的・教育的交流を行う東西協会(The East and West Association)を設立、講演会活動や機関誌『アジア』の発行、ラジオ放送や翻訳プログラムなど多彩な交流活動を展開した。東西協会の活動で注目すべきは、協会が戦時中に「アメリカの生活を理解するための本」として海外推薦用に文学作品十五冊を選抜、その選抜リスト七百五十部を諸外国の大学機関や図書館に配布した活動である^[45]。「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」を文学を通して海外に知らしめるという思考は、占領期GHQ/SCAPの日本民主化政策およびOWIや国務省等アメリカ政府による冷戦文化政策方針と軌を一にする。異文化を持つ人間同士の偏見や衝突は互いに対する無知が原因であるとし、作家として文字の持つ力を信じていたバックは、自ら選抜したアメリカ図書を通して、「特にアジアの人々にアメリカ人のことを伝え」ようと努めたのだ。

また、彼女は子供の福祉活動にも非常に熱心で、とりわけアジア系の子供達のアメリカ人家庭への養子縁組を支援した。彼女は養子縁組支援施設ウェルカム・ハウス(Welcome House)を設立、この施設を通して四十五年間に渡りアジア系孤児五千人以上に家庭を与える功績を残した^[46]。戦後、アジア各地でアメリカ兵男性とアジア人女性の間にも生まれた数千人もの混血児の問題は深刻な問題となっていた。バックは、戦後すぐにこの問題に正面から向き合い取り組んだ数少ないアメリカ人の一人である。彼女は、アジア人の子供と白人アメリカ人の両親から成る人種的にハイブリッドな家庭を、アジアとアメリカの究極的な友好関係の象徴と捉えた。家庭という人間関係の基礎を形成する

場における異文化・異人種同士の交わりは、将来的にはアメリカとアジアの間に横たわる外交問題の解決をもたらす、延いては共産主義に対するアメリカ民主主義の勝利を導く鍵と考えたのだ^[47]。

このように、バックは文筆活動、文化交流事業を中心にアメリカとアジアの懸け橋として尽力し、戦後文化外交の一役を担った。冷戦勃発までアジアに目を向けず、情報を得ようとしてこなかったアメリカのアジアに対する無知こそがアメリカ・アジア間の繋がりを阻む要因と信じたバックは、両者間の友好的関係樹立の為に最大限の努力を払う。ノーベル文学賞受賞作家として著名な彼女の活動は、1930年代から40年代アメリカのアジア観を肯定的なものへと変革し、人々の間にアジアに対する好意的イメージと理解を築き上げた。

だが、バックの真摯な道徳的・人道的信念から生まれたこれらの活動は、同時にアメリカの冷戦文化体制に沿い、結果としてそれを再構築する一翼を担った側面を持っている。例えば、クラインが指摘するように、バックの異人種間養子縁組による親子関係は、白人の親とアジア人種の子供の間にあるヒエラルキー、すなわち教え導く者としての白人優位性と、導かれ方向付けられる者としてのアジアの下位性からなる権力構造を内包する。西洋と東洋の関係を師弟関係や男女にジェンダー化された権力関係で表すオリエンタリズムに通底したこの新しい家族関係は、相互理解と協力を前提としながらも、冷戦オリエンタリズムの言説を実践化するものである。国内の人種問題が批判に曝されプロパガンダ政策に支障をきたしていたアメリカにとって、愛情によって繋がれた異人種間の親子関係の存在は、人種問題を克服し異文化に寛容な国家としての理想的アメリカ像を国内外に発信する格好の材料であった。事実バックのウェルカム・ハウスの活動は、冷戦プロパガンダ流通の役割を担った *Reader's Digest* や *Saturday Review* 等大手メディアが頻繁に記事に取り上げた。バックが福祉活動や文筆活動を通して強調した、アメリカとアジアの友愛が両者間の問題を解決するというロジックは、しばしばセンチメンタルなイメージと理想主義を伴い、土屋由香が指摘するように、アメリカのアジア進出を「国際親善」という非政治的なものへと転化させ、結果としてアジア・アメリカ間の現実的権力格差や人種の不平等から目を逸らすよう機能したのである^[48]。

アメリカのヘゲモニー性を看過した理想主義は、

バックの著作にも散見する。例えば、先述した1946年出版の『アジアの友へ』には、「私は日本を忘れない」と題した、日本を好意的に描写したバックの日本人読者へのメッセージが含まれている。この中でバックは、彼女が幼少期から数度に渡り日本を訪れ、その思い出は楽しいものばかりであることを、日本人は素晴らしい人ばかりであることを強調しながら、アメリカが日系人を強制収容したことをアメリカの恥とし、またアメリカ政府軍の日本への原爆投下を強く非難する。だが、こうした日本に対する友好的態度の背後には、彼女のアメリカに対する理想主義と日本に対する優越感が見え隠れする。例えば、アメリカの日本への原子爆弾投下について、アメリカ一般市民は原爆投下が実際に行われるまで「こんな爆弾があることさえ知らず」、原爆事態が「知識のはるか向こうにあった言葉」だと述べる。そしてこの武器を日本に投下する行為は、アメリカ人の「本質に背くことを（アメリカのある種の一部の人間によって）させられた」のだと言う。その証拠に、原爆投下後には国内から政府に対する「抗議書が殺到した」と主張する。彼女のこの論拠の根底には、同書内で彼女が力説する、アメリカ人を「単純で正直」な「一言でいえば、あなた方が友達にすることができる種類の人々」とする楽観的なアメリカ人観がある。本来正直で平和を愛する国民が原爆投下という非道な行為を行ったのは、その国民性の「本質に反する」、一部の人間の異常で例外的行為だと言うのだ。

またアメリカの日本占領については、日本人が占領軍に対して「優れた振舞いをしている」ためにアメリカ側は「大いに助け」られているとし、彼女は「私はこのような（占領に対する日本の）協力を期待していた」（傍線筆者）と述べる^[49]。だがこの占領は、アメリカ人が日本人を「支配しようと欲し」ているのではなく、「日本人が（戦前と）同じ方向に引きずられていかないように」するための民主化政策であると説明する。なぜならばアメリカは「帝国の責任なんぞを背負いこむことはまっぴらご免」であり、そもそも「帝国なんて彼（アメリカ人）の理想（と彼の好む生き方）に反する」からであると彼女は述べる^[50]。こうした彼女の発言には、日米間の圧倒的権力の格差の下に支配された日本の現状を「優れた振舞い・協力」と美化しながら軽視する彼女の理想主義と日本に対する優越的眼差しが垣間見える。在日アメリカ

占領軍関係者は、日本人を良く知る機会を多く持つがゆえに「東洋への偏見を少なくして帰国する」という彼女の主張には、アメリカ帝国主義の現実から目を逸らした日和見主義的側面が否定できないのだ。

バックはアメリカ政府の広報政策に反し国内の人種問題を正面から批判し、人種差別をアメリカ民主主義の汚点と公言して憚らなかつた為に強い反発を受け、次第にメディアから姿を消していく。徹底した平和主義ゆえに本人の意に反して共産主義的という非難さえ受けた彼女が、冷戦プロパガンダにナショナリスティックに加担したとは言えない。しかしながら、これまで述べてきたことが示すように、彼女のアメリカとアジアの友好・相互理解というスローガンは冷戦期アメリカの文化外交方針のイデオロギーと共振し、そして彼女のメディアにおける高い可視性は、そのイデオロギーに真正性と権威性を与える役割を果たした。その意味において、彼女もまたフォークナーと同様に一彼女は彼よりも複雑な立ち位置にありながら一アメリカの冷戦外交をアジアの地で実践した外交官役だったと言える。だが彼女の冷戦プロパガンダへの抵抗は、確かにアメリカ冷戦文化内部に異なる方向性を与えており、冷戦文化が一枚岩的ではなく内部に矛盾と複雑性を抱えながら形成されていたことを示すのである。

戦後日本のアメリカ受容

ここまで述べてきた、ワイルダー、フォークナー、バックの三人のアメリカ文学作家の示す「アメリカ」を、文化政策の受け手側である日本は極めて好意的に受け入れた。既に述べたように、ワイルダーの「小さな家シリーズ」は日本人読者の間で大変な人気となった。日本人読者の多くは、ワイルダーの西部開拓の物語に励まされ、生きる力を見出した。例えばある新聞記事は、この作品は「読むものにあふれるような豊かさと大きな勇気を与えないではおかない」と述べ、主人公の開拓者一家の「正直、勤勉、工夫、勇気」に溢れた姿を「伝統的なアメリカ市民精神のよさ」の表れであると称賛した^[51]。また文芸雑誌『白象』は、『長い冬』について、「（この物語を）読むと一つの推進力を与えられる。寒さ、食物の不足、交通の不便は勇気と敏腕とで当らるべき問題である。本書は著者の開拓書の如き意味において元気を鼓舞するものである」と評した^[52]。この二例の日本

人読者の感想において注目すべきは、どちらの例も作品に描かれた西部開拓者達の苦労や困難、そして彼等の困難に立ち向かう勇気や勤勉性に元気と推進力を感じ取っている点である。この日本人読者の好意的解釈は、ワイルダーの物語がアメリカの過去にも日本のような困難があり、そしてアメリカの人々がその困難に立ち向かい乗り越えてきた事実を日本人読者に強く印象付けたこと、そしてそのアメリカ人の厳しい経験に日本人が強い共感を抱いたことを示している。ある日本人読者は同シリーズの『草原の小さな家』について、「アメリカにも苦しく烈しい歴史がある事を知らせてくれます、興味をもって家中で読みました」と熱心に語っている^[53]。この読者例が示すように、敗戦国・被占領国日本にとって、アメリカは当時強さと豊かさの象徴であり、そのアメリカに日本が戦争で経験したような「苦しく烈しい歴史」があったことは衝撃であり、また極めて興味深いことだったのだ。

その日本人の感じた驚きと関心は、同じくワイルダーの『大きな森の小さなお家』の記者柴田徹士にも共有された。柴田は同作品のあとがきに次のような言葉を残している。

アメリカを、ぜいたくな国、のんきな国、と思っている人がたくさんあります。しかしその生活の底には、「開拓者の精神」というものが流れています。...あらゆる苦しみと戦って、一歩もしりぞかない。...独立独歩で、しかもみんなの中にあふれています。この精神は、今でもアメリカに強く流れているのです。...読んでしまった時には、まるで、自分もその生活をして来たような気がするにちがいません。そして、アメリカに対する理解を、ずっと、ずっと、深められるでしょう。^[54]

柴田のこの言葉が示すように、敗戦国日本にとって、アメリカは憧れの対象であると同時に、また憎しみや嫌悪の対象でもあった。戦後かつてない艱難にあった日本人の眼には、アメリカ人は「ぜいたくでのんき」にも映った。そのアメリカが、日本人同様飢えや寒さを経験してきたことは衝撃的であった。同時に、西部文学が描く開拓者達の苦しい生活の模様や困難の日々は、戦争で忍耐と努力を強いられてきた日本人読者にとって理解しやすく、また馴染み深い「まるで、自分もその生

活をして来たような」共感を覚えるものであった。

西部開拓者に苦難者としての共感を覚える心情は、他の日本人読者にも共有された。『長い冬』の記者石田アヤは、この物語への共感と親近感を次の様に表現する。

(物語中の開拓者一家の)単純な生活の中の変化の楽しさや恐怖や心配などに、みんな一番惹かれてたわ。それはちょうど、長い戦争の間に私達が味わった、命懸けの心配や緊張や努力や安心や喜びなどに通じていたからだと思うの。

石田のこの言葉が示すように、日本人読者の多くがワイルダーの作品に描かれた西部開拓者の生活に自身の戦時中の姿を重ね合わせて共感し「強く惹かれ」たのだ。

開拓者に戦後の自分の姿を見た日本人読者は、ワイルダーの開拓物語に生きる元気と未来への希望を見出した。『長い冬』では、主人公一家が長い過酷な冬を大変な忍耐と努力により生き延び、最後に待ちわびた暖かい春という幸福を得る。主人公達に自らの姿を重ね合わせた日本人読者にとって、開拓者達の成功と幸福は自らの未来を暗示するようであった。多くの者が物語に元気と推進力を感じ取り、そして柴田の言葉が示唆するように、開拓者達のように「あらゆる苦しみと戦って、一歩もしりぞか」ずに生きていればいつかアメリカのような繁栄した民主国家になれる、という憧憬と期待の念を抱いたのだ。

この時、上記の例が西部開拓者の「正直、勤勉」といった「伝統的アメリカ市民精神」を成功の鍵と捉えていることは重要である。なぜなら、この精神は勤勉や忍耐を美德とする日本人の伝統的道德心に通じる精神であるからだ。上記例が示すように、日本人読者はワイルダーの開拓物語を「正直、勤勉」の良き「アメリカ市民精神」に支えられた「頑張り」の物語と極めて日本文化的な解釈を行っている。この時、開拓者精神は西部開拓の歴史から派生したアメリカ独自の伝統的「市民精神」でありながら、同時に読者の日本文化的視野によって、日本人に馴染み深く理解・実践可能な精神として受容され、いわば読者の間で「日本的なもの」として受け入れられる。そして柴田がこのアメリカ伝統的精神を理解する時「アメリカに対する理解をずっと深められる」と主張したように、日本文化に密接に結び付けて解釈された開拓

者精神は、アメリカを権力と憧憬の象徴としながらも、日本が理解し且つ追従し得る「身近」な存在へと、日本人のアメリカ観を変容させたのだ。

アメリカ西部開拓者の経験に自らの戦時経験を重ね合わせ、アメリカに憧憬・羨望と共に深い共感を寄せる日本人の複層的意識は、日本人聴衆がフォークナーに向けた眼差しと重複する。南部を代表する作家フォークナーに対し、日本人読者は深い畏敬の念と共に一種の共感と親近感を寄せた。ある日本人はフォークナーに対し「あなたの国の南部と日本は共通のものがあすね、つまり古い伝統です」^[55]と述べてアメリカ南部と日本の間の共通性・類似性を指摘する。またある書評は彼の作品『サンクチュアリ(Sanctuary)』について、フォークナーの「素質」は「日本の読者に親しみ易いものを持っている」^[56]と南部人フォークナーと日本人の性質の類似性を認識している。加えて作家大岡昇平もまた、フォークナーの思考に日本の伝統的概念を見出した一人である。彼は来日中のフォークナーに彼がミシシッピ州の農園で「半ば隠遁的生活」を送る理由を尋ねた。大岡のこの問いに対し、フォークナーは「自分は作家であると同時に家長であって、家族を見なければならぬ。土地は先祖代々のもので、祖先に対して責任を持っている」と返答する。フォークナーのこの発言を、大岡は「恐ろしく古風な言葉が飛び出して」来たと描写し、「今や正に日本から消え失せようとしている古風で、善良で、はにかみ屋で、ひたむきな文学者の型を新来のアメリカの一流作家に感じたのは異様な経験だった」と衝撃を表す^[57]。家長という封建的家制度、土地の継承制度、血縁に基づく家名制度といったフォークナーが重視する社会風習は、日本が伝統的に継承してきた社会文化である。大岡の驚きは、戦後の民主化とアメリカ化によって日本が見直し放棄しなければならないと思われた日本の古い家制度を、アメリカの代表的「一流作家」が重んじているという、戦後日本人にとっては時代の振子を急転回させられたような経験、同時に日本の戦前的伝統文化に突如アメリカのお墨付きが与えられたような意外な経験に対する感情の表れであろう。時代の流れに動かされず独自の伝統的価値概念を維持するフォークナーと彼の体現する南部は、類似した社会制度を伝統としてきた日本人聴衆にとって理解し共感できる身近なアメリカ像だったのだ。

この「日本的」要素を兼ね備えたフォークナー

が自ら提示した敗戦の屈辱と戦後復興の苦難という日本との共通経験は、日本人の彼に対する共感と彼を同一視する視線を強める効果を持った。日本人にとって同じ敗戦の屈辱と苦難を成功裡に克服した彼はいわば戦後日本の先達者であった。そのフォークナーが、日本の文学はアメリカ南部文学が南北戦争後の混沌から生まれたようにいつか成功の路を辿るだろうと述べたことは、日本人聴衆に日本文学のみならず広く日本の社会文化の再興と発展への期待と希望に現実味を帯びさせるものであった。ゆえに多くの日本人が来日した彼の日本に対する具体的な印象、発展途上の日本文学への知見を求め、その彼の知見に自らの未来の道筋を見出したのだ。言い換えれば、先の議論に沿って考えるなら、日本人は侵略者・「強姦者」としてのアメリカを進んで忘却し、代わりにフォークナーに寄せた憧憬と羨望の眼差しを持ってアメリカを見つめ直しながら、同時にフォークナーと南部を同じ歴史的経験を共有する「同志」として共感し、フォークナーの成功と権威性に日本の将来的自己回復の路を見出そうとしたのだ。

白人アメリカ人でありながらアジア文化に精通し、自らアジアを友と呼びアメリカとアジアの対等な関係を説いたバックは、日本人にとって特別に「身近」なアメリカ人であり、同時に模範的なアメリカ民主主義思想の体現者であった。日本でベスト・セラーの座を獲得した彼女の代表作『大地』によって、彼女は東洋を知るアメリカ人作家として大変有名であり、年齢や性別を問わず広く人々の間で愛された。例えば、彼女の作品を訳した日本人翻訳者は、彼女を「改めて紹介するまでもなく有名で、「高い知性と広い人類愛を背景にしている上に、夫人(バック)が東洋をよく理解しているという強味を持っている」と評する^[58]。またある訳者は、彼女を「現在中国についての小説を書く人の中では世界中で一番えらい小説家」と表現している^[59]。こうした彼女の人気と知名度を背景に、彼女の著作は1930年代から80年代まで多数の日本語訳が出版されており、60年代以降アメリカ本土で薄れていく彼女の認知度と評価とは対照的に、日本では現在も尚彼女は重要なアメリカ文学作家としてその地位を保っている。

アジアとアメリカの相互理解を強調したバックを、日本人読者の大半がヒューマンイズムの作家と受け入れた。彼女の作品の書評には、「ヒューマンイズムの真価」^[60]、「ヒューマニストとしてのパー

ル・バック」^[61]、「全人類の問題」^[62]を扱う作家など、彼女がアメリカ・アジアの別を問わず人類の問題を描いた作家とする解釈が目立つ。例えば、東京帝大教授であった蠟山政道は、『大地』は「自然的存在としての土地であると共に、人間的存在としての『大地』でもある」と述べ、更に同作品の女性主人公については「特別に支那の女性と見るべきでなく、全世界の女性を代表しているものと見てよい」と述べて『大地』に普遍的人間性を見出した^[63]。またある書評家は、同作品を「大地より出で大地に還る人類生活そのものの歸趣すら、血のにじむ現実具体の中に暗示されている」と評し、登場人物の生きる姿に普遍的な人間性を読み取っている^[64]。このようにバックが中国の枠組みを越え「ヒューマニズム」作家と解釈されたのは、アメリカ・アジア二つの文化を持ち両者の結び付きを強調する彼女が、日本人読者にとって日米間に横たわる人種的・文化的・権力的差異の克服の象徴であり、差異を超越した人間同士の新たな関係を日米間にもたらす可能性を示す存在と映った背景があると思われる。それまで「誰も成し遂げてこなかった」^[65]中国・アジアのリアリスティックな描写と対象への深い愛情を持ちながら、人種や文化に関わりなく「人間」という視点からオリエンタリズムの二項対立を脱した（ように見える）世界観に立脚するバックに、日本人読者は人種的差異に寛容なアメリカの模範的民主主義を見出したのである。

アメリカ文化外交政策と文学—その機能と役割

開拓者の生きた西部、そして古い伝統と敗戦の経験を有する南部に強い憧れと羨望の眼差しを向けながら、同時にそれらに日本文化的要素を読み取り共感を覚える戦後日本人の重層的視線は、敗戦後日本が向かったナショナルな主体の再形成プロセスの在り方に重要な示唆を与えてくれる。これまでの議論が示すように、戦後日本人の多くが、ワイルダーの表象するアメリカの象徴的アイコンとしての西部フロンティアに戦後の日本に類似する過酷な生活体験、そして努力や勤勉といった日本人の伝統的精神を見出し、その共通経験に対し共感を覚えた。また、フォークナーが体現する敗戦の屈辱と戦時中の艱難という日本と類似する記憶と経験を持つ南部に、日本人は身近な共感と復興後の未来に対する期待を寄せた。そして、東洋と西洋の理解と絆の可能性を描いたバックのアジ

ア表象に、日本人読者は人種や文化の境界を越えた人間の普遍性を見出し、日米間の権力的格差を超越・克服した民主的平等関係の構築に現実味を覚える。こうした「アメリカ」に日本文化との共通点を積極的に見出し、アメリカとの差異を意識的に除去する日本人の解釈には、戦後アメリカとの関係性において形成してきた日本の自己意識形成の在りようを見ることが出来る。冷戦勃発による占領国アメリカとの関係の変化、1950年代に入り徐々に始まる日本国内の戦後の混乱の収束、そして1952年の占領終結を経た日本の戦後の意識は、アメリカという脅威的「他者」により「強姦」され強制的に自己喪失を迫られた自己ではなく、むしろ伝統的日本文化のアメリカ文化への通用性を見出すことによって、次第に日本文化の再肯定、換言すれば日本への回帰へと向かっていく。だが同時に、この重層的視線はアメリカとの歴史的経験上の共通項を持つという、いわばアメリカを後ろ盾として成される日本のナショナルな自己意識形成の一面をも確かに併せ持っている。伝統的日本を改めて自己称揚しながら、同時にその称揚の拠り所としてアメリカを「内」に取り込む二方向的な眼差しがここにはあるのだ。

この「二重の眼差し」を、吉見俊哉は戦後日本社会の天皇や女性の地位に対する新しい認識、また勃興する新たな大衆文化に見出している。吉見によれば、戦後日本は復興を目指しアメリカを模範とすべき優越的他者として必要としながらも、同時にその他者の権威を新日本の有力な社会的・精神的基盤として内在化し、その上に戦後的自己を戦略的に再構築してきたという。この視線の二重構造性は、日本がアメリカの傘下に自ら進んで入り、日米間の支配—被支配の関係を（ジョン・ダワーの言葉を借りれば）「抱擁」することで、自らのアジアにおける帝國的暴力の過去を積極的に忘却し、アメリカというヘゲモニーと結び付き、戦前帝国として享受してきた地位を保持したまま「新たな自己を立ち上げる」ことを可能にしてきた^[66]。

吉見のこの「他者—自己としてのアメリカ」論は、本論文が示してきた戦後日本人のアメリカ—特に地政学的西部と南部—に対する眼差しと軌を一にする。アメリカに対する二重の眼差しは、西部の象徴する民主主義、勤勉と忍耐の開拓者精神、南部の伝統的社会と敗戦後の復興を称賛すべき「アメリカ—日本」の経験・性質として意識化す

る。これにより、日本の戦後は絶対的他者によって強制的にもたらされた自己否定や自己喪失ではなく、むしろ自ら了解した上で受け入れた必要で「自然」な自己再生の路となる。つまり、日本の戦後の国家的アイデンティティ形成は、アメリカという新しい「戦後」を迎えながら、同時に自己回帰という「戦前」を継承する二重構造性を持っていたのだ。

理想的民主国家アメリカ像、「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」を戦後冷戦下日本に教示すべく用いられたアメリカ文学は、プロパガンダ政策を実施したアメリカ政府のほぼ思惑通りにアメリカに対する好意的なイメージと解釈を日本人に呼び起こした。本論文が取り上げた作家達の作品が表象し、また彼等作家自身が体現して見せた「アメリカ」は、日本人と同じように困難や苦難を経験し、それを日本人と同じく努力や勇気によって乗り越えたアメリカ、また差異に寛容でありながら伝統を軽んじない、極めて人間的なアメリカ、権力主義や帝国主義のイメージからはかけ離れたアメリカ像を提供している。海外の人々を、冷戦オリエンタリズムに裏打ちされたアメリカの文化外交イデオロギーに則して更生・再教育することを試みたアメリカの図書政策は、この意味で順調に成功を収めたと言える。同時にこの好感的なイメージを旗印に、アメリカもまた自らを再教育し戦後の新たな自己イメージの構築へと突き進んだ。アメリカの原点としての古き良き西部に回帰しながら、同時に東洋に友好的関心を示し、そして差異を持つ者に対し公平で寛容なアメリカという、歴史的過去と新時代の冷戦言説を融合させた国家的アイデンティティ構築を、アメリカは確実に進めて行ったのである。

だが日本人の文化的解釈は、アメリカに対して先駆者・先達者としての憧憬と畏敬の念を抱き続けながらも、一方ではそのアメリカに日本との同質性を意識的に見出すことで、戦後日米間の不均衡な国家間関係を疑似的対等関係へと潜在的に転換する。アメリカを優越的他者として受け入れながら、同時にその他者の権威を「内側」に取り込みそれを拠り所に再び自己を回復させようとする戦後日本の「二重の眼差し」は、日本が単に他者に「民族強姦」されることを許さず、アメリカを中心とする権力関係図に自ら進んで包摂・配置されることで、戦前的自己を保持しながらも西洋と対峙可能な日本という新たな自己形成を可能にす

るのである。この日米関係が示すように、冷戦下日本との対外関係において理想的自己像の形成と普及を求めたアメリカと、アメリカとの対外関係において同じく理想的自己像の形成を模索した戦後日本の間には、それぞれ別個の自己利益を追求しながら、同時にその利益を得る為に互いを必要とし利用し合う相互依存関係があったのだ。そしてこの日米間の相互依存関係を基盤に、日米両国は共にアメリカを主体とする冷戦レジームを形成・維持していたのだ。

文学の意味解釈は、その作品が普遍的に生み出す意味を持つ一方、読み手の視点・思考により作品の解釈が多様に変化、拡大する可能性をも併せ持つ。「アメリカらしさ」を日本に伝え教授するための心理的武器、ソフト・パワーとして用いられたワイルダーの西部、フォークナーの南部、バックのアメリカと融合するアジア表象は、戦後アメリカの冷戦政策とナショナル・アイデンティティ形成に有効に働く政治的意味合いと役割を付与され、そして実際にその役割を果たしながら、一方で日本人読者の文化的視野により、日本文化という異なるコンテキストにおいて戦後日本の新たな自己形成においても機能することとなった。本論文が取り上げた三人のアメリカ文学作家は、アメリカが日本で実施した巨大な図書政策の一部である。しかしながら、フォークナーとバックのように高い知名度を誇りメディアにおいて高い可視性を持った作家達の存在は、受け手側である日本人読者の作品解釈およびアメリカ観を大きく左右したと言える。彼等「文学大使」と作品の存在は、日米それぞれの文化的コンテキストにおいてそれぞれの読者のコードにより解釈され、冷戦の言説・「戦後」の言説を生産しながら、日米両国を新たな関係で結び付ける冷戦イデオロギー形成の一翼を確かに担ったのだ。

註

この論文は、鈴木紀子「思想教育と文学の政治学—GHQ/SCAPの日本民主化政策とアメリカ西部フロンティア言説の関係性」筑波大学人文社会科学研究所現代語・現代文化専攻紀要『論叢現代語・現代文化』4(2010)157-181の一部を加筆修正の上転用した。また、同論文内容は2013年6月1日開催のアメリカ学会第47回年次大会自由論題において口頭発表を行った。

[1]John B. Hench, Books as Weapons: Propaganda,

Publishing, and the Battle for Global Markets in the Era of World War II (Ithaca and London: Cornell UP, 2010)23. アメリカ書籍販売者協会とは、1900年に設立されたアメリカ・カナダの書籍販売店を支援する非営利組織である。読書推進プログラム等書籍販売向上に繋がる事業活動を展開した。

[2]Hench, 70.

[3]Hench, 4. OWI は第二次世界大戦勃発後ローズベルト大統領政権下設立された政府組織で、国内外の情報活動統括に当たった。

[4]Hench, 6.

[5]Hench, 6.

[6]Joanne P. Sharp, *Condensing the Cold War: Reader's Digest and American Identity* Minneapolis and London: U of Minnesota P, 2000, 87.

[7]土屋由香『親米日本の構築—アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』(東京: 明石書店, 2011) 249.

[8]“President Eisenhower's remarks in Washington, D.C. September 11, 1956(Public Papers of the President, Dwight D. Eisenhower, 1956),” Dwight D. Eisenhower Presidential Library and Museum, <http://www.eisenhower.archives.gov/research/online_documents/people_to_people.html>

[9]Hench, 70.

[10]今まど子(1996)「アメリカ教育使節団の贈物」『中央大学文学部社会学科紀要』6巻, 55.

[11]GHQ/SCAP, CIE, “Gift Books Will Be Used as Guidelines in Rewriting of Texts for Schools,” CIE Bulletin 16 June 1947: 2.

[12]GHQ/SCAP, CIE. *Education in the New Japan* (Tokyo: GHQ/SCAP, CIE, 1948) 384. CIE 図書館は、1945年の東京第一館創設以降、各主要都市に二十三館設置された。

[13]民間情報教育局 (Civil Information and Education Section, (CIE)) は GHQ/SCAP の一組織で、情報・教育・宗教などの文化的・社会的問題を扱った。

[14]回顧文集編集委員会編『CIE 図書館を回顧して』(回顧文集編集委員会, 2003) 参照。

[15]入札制度が実質的に開始されたのは、1948年5月に CIE が計百冊の選抜英米図書に翻訳権を与え、6月に第一回入札が実施された時である。この入札制度は、1951年11月に終了するまで全十四回に渡り競争入札が行われた。全入札を通し、総計四七四冊の外国図書が日本の出版社により落札された。この CIE 翻訳許可外国図書は日本の出版会の

非常に高い関心を集め、毎回入札時には数多くの出版社が詰め掛け、相当な高値で落札する出版社も少なくなかった。また一般大衆も高い関心を持って翻訳外国図書を受け入れた。

[16]GHQ/SCAP, CIE. “Foreign Copyrighted Books,” CIE Bulletin 26 May 1948: 14.

[17]GHQ/SCAP, CIE, “Book Bidding Results: Fifty-Three Japanese Publishers Awarded Translation Rights for 91 American and British Books,” CIE Bulletin 23 June 1948: 13.

[18]Missouri Secretary of State, “A Missourian's Books Used in Japan,” *Official Manual of the State of Missouri 1949-1950* (Missouri: The Secretary of State, 1950) 17.

[19]この貴重な情報は、Laura Ingalls Wilder Historic Home and Museum の Darlys Winn 氏よりご提供頂いた。記して感謝申し上げます。

[20]読書奨励された西部文学の一例を挙げると、Wilder の「小さな家」四作品の他、Willa Cather 作 *My Ántonia*, *O Pioneers!*, Carrol Brink 作 *Caddie Woodlawn*, Marjorie K. Rawlings 作 *The Yearling*, Stephan M. Meader 作 *Jonathan Goes West*, Rose Wilder Lane 作 *Let the Hurricane Roar* 等がある。

[21]谷川建司『アメリカ映画と占領政策』(京都: 京都大学学術出版会, 2002) 178.

[22]Elizabeth Jameson, “In Search of the Great Ma,” *Journal of the West* 37(1998): 47.

[23]Joseph Blotner, “William Faulkner, Roving Ambassador,” *International Educational and Cultural Exchange* (Summer 1996): 5-6.

[24]Kenkyusha, ed., *Faulkner at Nagano* (Tokyo: Kenkyusha P, 1956) 85.

[25]Faulkner at Nagano, 137-138.

[26]Faulkner at Nagano, 86.

[27]Faulkner at Nagano, 86.

[28]Faulkner at Nagano, 162.

[29]Faulkner at Nagano, 186.

[30]Faulkner at Nagano, 162-163.

[31]Faulkner at Nagano, 185-186.

[32]寺沢みずほ『民族強姦と処女膜幻想』(東京: 御茶ノ水書房, 1992) 4.

[33]寺沢, 10.

[34]寺沢, 13. フォークナーに直面した日本人達は、彼を「あなたはアメリカ人作家であるのみならず、世界の作家であります」、「あなたはアメリカを代表するのみならず、作家として世界を代表してい

るのです」と称賛している。

[35] “culturally bifocal”という表現は、バックが自らを表した言葉である。バックに関する基本情報と経歴については、Peter Conn, Pearl S. Buck: A Cultural Biography. Cambridge: Cambridge UP, 1996, を参照した。

[36] Conn, xiv.

[37] Hench, 161.

[38] 『大地』は、マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ(Gone with the Wind)』(1936)と共に二十世紀の大ベスト・セラーとして記録に残る作品である。

[39] Conn, 181.

[40] 英文原題不明。このバックの著作は、もともと彼女がインドの新聞掲載の為に依頼されて執筆したものであるが、後にアメリカのユナイテッド・プレス社がこの著作の日本での出版を彼女に提案した。日本で出版されたものはバックの全文ではなく、一部抜粋である。全文は『サンデー毎日』に掲載された(掲載は昭和21年と思われるが、現物未発見)。

[41] バック『アジアの友へ』, 8-10.

[42] 「本の贈り物」の情報は、今まど子「アメリカ教育使節団の贈物」を参照。

[43] 第一回入札で競り落とされた外国図書の平均翻訳権使用料は定価の15%であったのに対し、『水牛飼いの子供たち』は32%と高額であった。

[44] Conn, xv.

[45] バック『アジアの友へ』, 55.

[46] Conn, xv.

[47] Klein, 第四章参照。

[48] 土屋, 262.

[49] 「日本を忘れない」92-98.

[50] 「日本を忘れない」99.

[51] 「染み出るアメリカ市民精神のよさ—『長い冬』」『日本読書新聞』(1949年3月9日)2.

[52] 「入札されたる外国児童図書」『白象』1949年, 243.

[53] 「わが家の本棚—家中みんなで読んだ本」『日本読書新聞』(1951年11月1日)7.

[54] ローラ・インガルス・ワイルダー『大きな森の小さなお家』柴田徹士訳(東京:文祥堂, 1950)180-181.

[55] Faulkner at Nagano, 85.

[56] 寺崎活「本能と原始的思考—よく計算された構想 フォークナー『サンクチュアリ』」『日本読書

新聞』1951年1月31日, 3.

[57] 大岡昇平『文学の運命』の理解者』『朝日新聞』1955年8月4日, 5.

[58] パール・バック『アジアの友—アメリカ人の生活と国民性について』石川欣一訳(東京:毎日新聞社, 1946)あとがき102.

[59] パール・バック『水牛飼いの子供たち』柴田徹士訳(大阪:文祥堂, 1950)105.

[60] 本田文夫「異常な子を持つ親への激励—パール・バック著『母よ嘆くなかれ』より」『日本読書新聞』1950年11月29日, 8.

[61] 鶴見和子「あたらしい光の下に—ヒューマニストの見る中国革命—パール・バック著『郷土』」石川欣一訳『日本読書新聞』1950年2月1日, 3.

[62] 「パール・バックの長編家庭小説『郷土』」『日本読書新聞』1950年11月30日, 1.

[63] 蠟山政道『『大地』の教訓について』『東の風西の風—代表選集』(東京:第一書房, 1938)巻末. 尚, 当箇所は現代的仮名遣いに直して引用した。

[64] 石川三四郎「感劇の大著作」『東の風西の風—代表選集』巻末. 尚, 当箇所は現代的仮名遣いに直して引用した。

[65] 日本人によるバック批評には、彼女の著作を文学史上初めて真剣に中国を扱った作品とする評価が目立つ。例えば谷崎潤一郎は、バックの作品を「真面目に支那を取り扱った長編小説などは一つも試みられていない」と述べる(「題材が新鮮で近年にない感興」『東の風西の風—代表選集』巻末)。

[66] 吉見俊哉『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』(東京:岩波書店, 2007)。「他者—自己としてのアメリカ」も同書からの引用である。日米間の支配—被支配の関係の「抱擁」は、吉見が同書で用いている表現であるが、この概念はダワー『敗北を抱きしめて』上下巻, 三浦陽一他訳(東京:岩波書店, 2007, 2009)の議論を基盤としたものである。

引用文献

[1] Hench, John B. Books as Weapons: Propaganda, Publishing, and the Battle for Global Markets in the Era of World War II. Ithaca and London: Cornell UP, 2010.

[2] Sharp, Joanne P. Condensing the Cold War: Reader's Digest and American Identity Minneapolis and London: U of Minnesota P, 2000.

- [3] 土屋由香『親米日本の構築—アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』東京：明石書店，2011.
- [4] “President Eisenhower’s remarks in Washington, D.C. September 11, 1956(Public Papers of the President, Dwight D. Eisenhower, 1956), Dwight D. Eisenhower Presidential Library and Museum. http://www.eisenhower.archives.gov/research/online_documents/people_to_people.html (accessed 2012-06-22)
- [5] 今まど子「アメリカ教育使節団の贈物」『中央大学文学部社会学科紀要』1996, 6巻, p.55.
- [6] GHQ/SCAP, CIE, “Gift Books Will Be Used as Guidelines in Rewriting of Texts for Schools,” CIE Bulletin 16 June 1947, p. 2.
- [7] GHQ/SCAP, CIE. Education in the New Japan. Tokyo: GHQ/SCAP, CIE, 1948, p.384.
- [8] 谷川建司『アメリカ映画と占領政策』. 京都：京都大学学術出版会, 2002, p.178.
- [9] GHQ/SCAP, CIE, “Book Bidding Results: Fifty-Three Japanese Publishers Awarded Translation Rights for 91 American and British Books,” CIE Bulletin 23 June 1948, p.13.
- [10] Missouri Secretary of State, “A Missourian’s Books Used in Japan,” Official Manual of the State of Missouri 1949-1950. Missouri: The Secretary of State, 1950, p.17.
- [11] Jameson, Elizabeth. “In Search of the Great Ma.” Journal of the West 37, 1998, p. 42-52.
- [12] Blotner, Joseph. “William Faulkner, Roving Ambassador.” International Educational and Cultural Exchange, Summer 1996, p.1-22.
- [13] Kenkyusha, ed. Faulkner at Nagano. Tokyo: Kenkyusha P, 1956.
- [14] 寺沢みずほ『民族強姦と処女膜幻想—日本近代・アメリカ南部・フォークナー』東京：御茶の水書房, 1992.
- [15] Conn, Peter. Pearl S. Buck: A Cultural Biography. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- [16] バック, パール『アジアの友へ—アメリカ人の生活と国民性について』石川欣一訳, 東京：毎日新聞社, 1946.
- [17] Klein, Christina. Cold War Orientalism: Asia in the Middlebrow Imagination, 1945-1961. CA: U of California P, 2003.
- [18] バック, パール『水牛飼いの子供たち』柴田徹士訳, 大阪：文祥堂, 1950.
- [19] ワイルダー, ローラ・インガルス『大きな森の小さなお家』柴田徹士訳, 東京：文祥堂, 1950.
- [20] ワイルダー, ローラ・インガルス『草原の小さな家—少女とアメリカ・インディアン』古川原訳, 東京：新教育事業協会, 1950.
- [21] 吉見俊哉『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』東京：岩波書店, 2007.

Abstract

How did American literature get involved in the United States’ Cold War diplomacy? With this focal point in mind, this paper pursues how American writers and their literary works were related to the US Cold War policies, focusing on three prominent American writers—William Faulkner, Pearl S. Buck, and Laura I. Wider. This paper shows these American writers and literature played a significant role in constructing the US and Japan’s national identity in the postwar era.

(受付日：2013年7月24日，受理日：2013年8月26日)

鈴木 紀子（すずき のりこ）

現職：大妻女子大学文学部英文学科助教

筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻修了。

博士（文学）。

専門はアメリカ文化。現在は、戦後の日本とアメリカの文化的関係について、特に文学作品や映画、漫画等のメディアをめぐるアメリカの文化政策と日本のアメリカ文化受容に焦点を当て研究を行っている。主な著書：

The Re-Invention of the American West: Women's Periodicals and Gendered Geography in the Late Nineteenth-Century United States（単著，Edwin Mellen Press(USA), 2009）。

「思想教育と文学の政治学—GHQ/SCAP の日本民主化政策とアメリカ西部フロンティア言説の関係性—」『論叢 現代語・現代文化』第4号，157-181頁，2010年。